

特別展 小堀四郎

会期 昭和61年7月29日(火)～9月7日(日)

※第一会場 (地下1階陳列室)

※第二会場 (2階特別陳列室)

渋谷区立松濤美術館



赫光 (昭和44年)

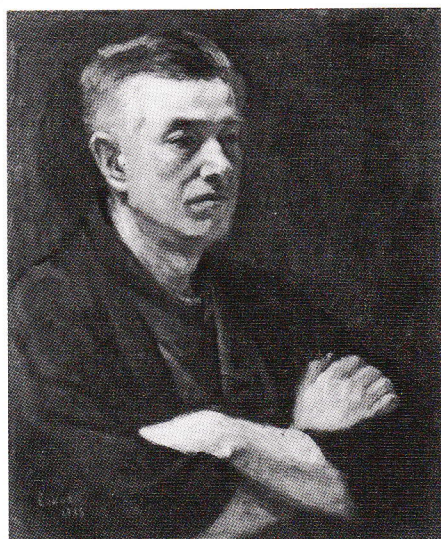
◆講演会 8月2日(土)午後2時～

「画家としての小堀四郎」

清春白樺美術館長 三輪福松氏



レンブラント「ベッサベ・オー・パン」(模写)昭和5年



中勘助氏像 (昭和13年頃)



鶴川風景 (昭和19年)

小堀四郎氏は、明治35年愛知県名古屋市中区南呉服町に生まれた。尾州徳川藩の漢字者の家系に育ち、幼少より漢学的素養をつちかわれた。

愛知一中に学び、校長のマラソン王としても有名な日比野寛氏に薫陶をうけ、人生の孤独を闘い抜く勇気を与えられたという。三年の時、父に美術学校進学希望をうちあげ、「絵描きになったら乞食になるぞ」、「最後迄やり抜くなら許す」といわれるが、結局東京美術学校西洋画科に入学することとなった。当時の教授陣には、校長正木直彦、西洋画科主任教授黒田清輝、一年担任長原孝太郎、二年担任小林万吾、三年担任藤島武二、岡田三郎助、和田英作、同期生には猪熊弦一郎、荻須高德、牛島憲之、岡田謙三、小磯良平、山口長男らがいた。卒業後、研究科に進み、同期の学友と上社会^{じやう しゃかい}を結成、第一回展を上野松坂屋で開いた。

昭和3年渡欧、五ヶ年を絵画研究に費した。ルーブル美術館では、レンブラント「ベッサベ・オー・パン」、コロエ「青衣の女」、ドーミエ「洗濯女」「クリスパンとスキヤパン」を模写、またフランス国内を中心に、ベルギー・オランダ・ドイツ・オーストリア・ハンガリー・イタリア・スイス・スペイン・モロッコなどを絵画研究のため旅行した。

昭和8年帰国。藤島武二のすすめにより渡欧作品展を開催。昭和9年、藤島武二の媒酌により、森鷗外の次女杏奴と結婚、東京世田谷にアトリエを建てた。杏奴氏は現在、文筆家として活躍しているが、当初は同じく画家をめざし、パリに留学していた。互によりき理解者であった。

昭和10年、松田文相の帝展改組問題に端を発した美術界の混乱に際し、小堀四郎氏は敬愛する師藤島武二から、「出来れば団体には関係するな」といわれ、それ以降画壇とはまったく離れ、年一回の上社会にのみ出品することとなった。

昭和20年、妻子の疎開先であった信州蓼科に一人移り住み、農耕のかたわら作画に励んだ。この間に自然の神秘と尊厳さに心ゆくまで打たれたという。昭和30年に東京に帰るが、この十年間の作品には、「高原の夕陽」「妻の像」「小梨と藤」「諏訪湖の夏花火」「秋の星」などがある。

帰京後は、東北、北陸地方などを旅し、日本の民俗的精神に触れながら制作を行なった。「和而不同」「恐山の巫女」「風雨波濤」「赫光」などの作品が描かれた。

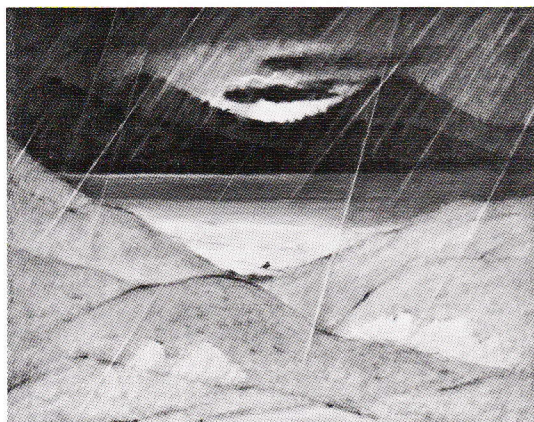
昭和51年、縁あって東京大学イラン・イラク学術調査団の発掘見学の機にめぐまれ、イラン・イラクへ旅行するが、この時の情景を描き上げたのが「無限静寂・信・望・愛」の三部作である。この作品は現在、築地カトリック教会の聖堂



諏訪湖の夏花火(昭和27年)



高原の星夜(昭和36年)



生命の神秘(昭和54年)

祭壇にかかげられているが、これに関して谷川徹三氏は、「それは祭壇画の常套を破ってはいるものの、聖画の格にはまった神秘の感をただよわせ、並ならぬ画境の高さと深さをさえ感じさせた。ここには東洋の霊性と西洋の霊性との宇宙的一体感の象徴的表現がある。」と述べている。小堀四郎氏の芸術を言い尽した言葉といえる。

現在84歳、ますます盛んに制作に励んでおられる。

小堀四郎略年譜

- | | |
|-------------|---|
| 明治35年(1902) | 名古屋市に生まれる。 |
| 大正9年(1920) | 愛知一中卒業。 |
| 大正10年(1921) | 安田稔の紹介により藤島武二に師事。 |
| 大正11年(1922) | 東京美術学校入学。校長正木直彦、西洋画科主任教授、黒田清輝、一年担任長原孝太郎、二年担任小林万吾、三年担任藤島武二、岡田三郎助、和田英作の教授陣であった。同期生に猪熊弦一郎、荻須高德、牛島憲之、岡田謙三、小磯良平、山口長男らがいた。 |
| 大正13年(1924) | 安田稔の模写・レンブラントの「兜の男」を模写。 |
| 昭和2年(1927) | 東京美術学校西洋画科を卒業。研究科に進む。同期の学友と上社会を結成、上野松坂屋で第1回展。 |
| 昭和3年(1928) | フランス留学。渡欧五カ年のうちフランス国内を中心に、ベルギー・オランダ・ドイツ・オーストリア・ハンガリー・イタリア・スイス・スペイン・モロッコ・イギリス等を絵画研究のため旅行する。ルーブル美術館にてレンブラント・ドーミエ・コロを模写。 |
| 昭和8年(1933) | 帰国。渡欧作品展を上野松坂屋、名古屋松坂屋にて開催。第14回帝展に入選。 |
| 昭和9年(1934) | 藤島武二の媒酌により森鷗外の次女杏奴と結婚。 |
| 昭和10年(1935) | 松田文相の帝展改組問題による美術界の混乱をみて、藤島武二の奨めにより画壇を離れる。以後は年1回の上社会にのみ出品。 |
| 昭和15年(1940) | 此の頃から東洋の精神にひかれ、日本の伝統の残る東北地方に目を向ける。 |
| 昭和20年(1945) | 妻と子供二人を蓼科に疎開させ、独り東京に残る。以後本人も蓼科に移り農耕に従事し、食糧を世田谷に運ぶ生活が続く。 |
| 昭和30年(1955) | 東京に帰る。東北・北陸地方を旅行。 |
| 昭和33年(1958) | 日本橋白木屋での模写による「泰西名画展」にレンブラント「ベッサベ・オー・パン」「兜の男」ドーミエ「グリスパンとスキヤパン」「洗濯女」を出品。 |
| 昭和51年(1976) | 東京大学イラン・イラク学術調査団の発掘見学の機にめぐまれイラン・イラクへ旅行。銀座日動画廊での上社会50周年展に出品。 |
| 昭和53年(1978) | ウイルデンスタイン東京にて小品を中心とする油彩35点による個展開催。 |
| 昭和60年(1985) | 中日新聞本社の主催にて、名古屋市・ギャラリー・アーバンにて大作を中心とした油彩71点により自選展を開催。 |
| 昭和61年(1986) | 渋谷区松濤美術館にて特別展「小堀四郎」を開催 |

【美術相談】

専門知識と経験豊富な美術作家を招き、みなさまの文化活動の援助になればと美術（制作）相談室を開設します。

★相談日・相談美術作家

8月3日(日)午後1:00～4:00

洋画家 遠藤原三氏

日本画家 荒井朝吉氏

8月24日(日)午後1:00～4:00

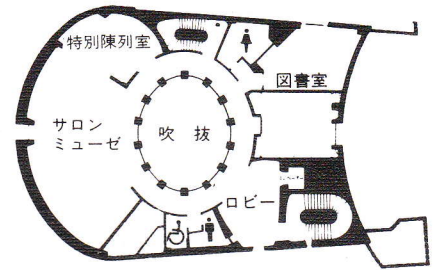
洋画家 西嶋俊親氏

日本画家 荒井朝吉氏

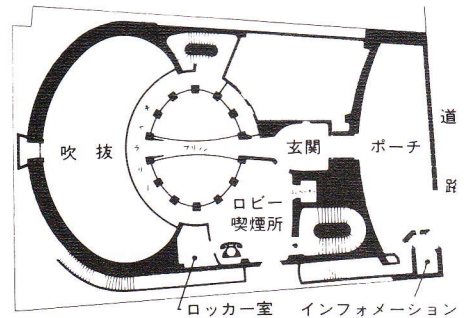
★申込方法

事前に電話で相談内容を申し込み下さい。

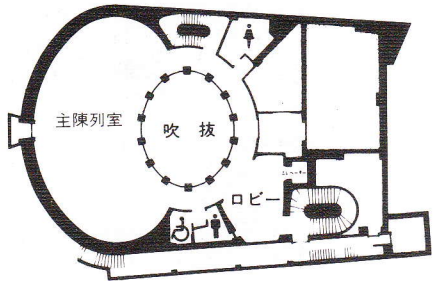
2階



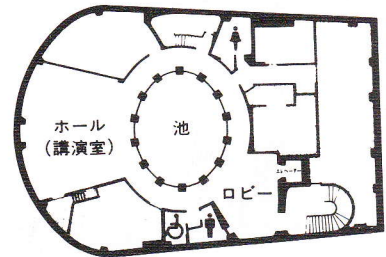
1階



地下1階



地下2階



■美術映画会

★8月17日(日) 午後2:00～

「ルーブル美術館」Ⅰ

★8月31日(日) 午後2:00～

「ルーブル美術館」Ⅱ

- 会 期 昭和61年7月29日(火)～9月7日(日)
- 休 館 日 第2日曜日及び他の週の月曜日、祝日の翌日
8月／4日(月)・10日(日)・18日(月)・25日(月)
9月1日(月)
- 開館時間 午前9時～午後5時（ただし入館は4時30分）
- 入 館 料

	個 人	団体(20人以上)
一 般	200円	160円
小中学生	100円	80円

